

戦争資料展示実践とデジタルアーカイブ理論

伊勢原市「平和事業」との協働の成果より

水島久光

War Materials Exhibition Practice and Digital Archive Theory
From Isehara City Peace Project

MIZUSHIMA Hisamitsu

Abstract

The author has been collaborating with Isehara City in Kanagawa Prefecture on the "Peace Project" since late 2014. Especially in 2022 and 2023, after the COVID19 crisis, the author has been planning and implementing an exhibition of war-related materials. Since the publication of my book on the transmission of memory on the 75th anniversary of the end of the Asia-Pacific War, the author has been working in various regions and research groups to empirically confirm the significance of the practice and theory of digital archiving, especially the sharing of "metadata schema". When we look back at "exhibitions" and "digital archives" from the perspective of structure, we can find many commonalities between them. Whether they are physical (primary) materials or reference (secondary) materials via photocopying or networks, the function of the "arrow of symbols" as an opportunity for meaning, which points to the connection between "objects and words," is a circuit that goes back and forth between the virtual of thought and the real of living (experiencing and recognizing).

1. 戦争資料に関する実践研究の続章として

筆者は2020年に出版した『戦争をいかに語り継ぐか：「映像」と「証言」から考える戦後史』（NHK出版）の終章・終節の最初の段落を、「未だに、我々は戦争を終えることができないでいる」の言葉で締めている。この一言には「戦争は終わったはずではないのか？」という反語的なニュアンスを込めたつもりだったが、残念ながら現実はそれより遥かにシビアであった。

2022年のウクライナ侵攻、2023年のガザ地区の戦闘、そしてそれらを材料に危機感を煽る人々を見るにつけ、悠長に構えてはられない思いが募る。

沖縄の基地反対運動を揶揄するツイートが繰り返されている。アテンション・エコノミーが稼ぎ出すフリクエンシーは、いつしかトークンをタイプ化し、正当化の土壌が形成される。ネット的言説の洪水は、まるで歴史という川の流れを全く変えてしまったようだ。まずは「党派性」ありき——米大統領選から、宗教やアイドル「推し」に向かう心性まで、「信じよ」が始めにあり、エビデンスは後から都合よく貼り付けられる。「ポスト・トゥルース」の時代はこうして作られるのだという事例ばかりが日々タイムラインに並ぶ。

大げさな物言いかもかもしれないが、だからこそ「アーカイブ」を論じるべきなのである。権威主義的な記録の集積ではない。市民に開かれ、主体的にアクセスしうる「仕組み」「考え方」が必要だ。デジタル技術にはその機能的な下支えが期待できる。その思いからさまざまな構築プロジェクトにも積極的にコミットしてきた（2017年からデジタルアーカイブ学会理事）。しかしここに壁があった。『戦争をいかに語り継ぐか』出版後、同学会にて「戦争関連資料に関する研究会」を発足させた。しかし、上手くいかなかった。約2年弱で一旦休会とした。

「アーカイブ」の必要性については賛同するものの、対象への距離や（イデオロギーというほど明確ではないにせよ）何らかの人々の思考を方向づけているものが、本来の期待であるところの「つながり」の形成を阻むこととなる。戦争はその極北にある。「資料の何を残し、何を伝えるべきか」の合意なきところに積み重ねられた数多の資料群は、現に次世代に手渡すことができず、瓦礫の中に還らざるを得ない危機の中にある。

本研究ノートは、その「壁」の大きさに対する、「ささやかな」抵抗の記録である。

2. 伊勢原市との共同事業の展開

東海大学と包括協定を結ぶ伊勢原市の平和事業（平和史料収集・公開事業）¹に水島研究室が協力するようになったのは、2014年秋からである。同市でこの事業を主管する市民協働課からのオファーがあり、翌年の戦後70年を控え、市内在住（または所縁の）体験者の証言を映像で残すプロジェクトが始まった。筆者はこの共同事業を進めるにあたり、学生によるインタビュー形式を提案した。質疑応答を通じて世代差や知識差による、様々な共有し得ないものの徴候を刻むことができるだろうと考えたからである²。

結論から言ってその目論見は当たった。もちろん一定レベルの歴史的知識は持ったうえでではあるが、それでも21世紀に育った日常感覚から繰り出される質問に、体験者たちは時に戸惑い、時にそれを引き金にそれまでの「一方通行的講話」では触れなかった事実や心情を言葉にした。2015年1月～2016年7月に収録した10名の映像のいずれにも、男性と女性、従軍年齢に達していたか否かの差はあるが、そうした痕跡をはっきりと見てとれる。

このインタビュープロジェクトは、その後2017年12月～19年8月には「伊勢原市被爆者の会」（市内在住の広島・長崎での被爆者の会）メンバーを対象として実施。また2020年からは、直接の体験者と新たに会える機会がほぼなくなってきたことを背景に、市内の7つ地区

自治会ごとに「地域に残る戦時期の記憶」を映像作品にして残すシリーズ（「伝えたい想いを乗せて」）をスタートさせた。一方、平和事業のもう一つの柱である「中学生ヒロシマ平和の旅」（1995年第一回）に2015年から大学生と同行。2018年まで映像記録を残した（2019年は、中学生自身によるスライドショー制作を支援）。

伊勢原市はまた、これら平和事業の成果を市民と共有する場として、毎年8月に「平和のつどい」を開催してきた。筆者も2015年からインタビューと「中学生ヒロシマ平和の旅」映像の上映・解説のために出席した。しかしこの「つどい」も2020年からはコロナ禍で開けなくなった。そこで2022年、その代わりとして「平和を祈念するパネル展示」が企画され、新たに協働事業とすべくオファーがあった。それに対して筆者は、前掲書やデジタルアーカイブ学会で示した問いと仮説をベースに展示計画を提案した³。

3. 伊勢原市「平和を祈念するパネル展示」（2022年）の開催

3-1 2022年度展示のターゲットとコンセプト

2022年の「パネル展示」の企画は、もともと感染症への配慮からの発案ではあったが、会場の伊勢原市市民会館の市民ギャラリーでは、以前から「平和のつどい」の開催に合わせて、何らかの戦争と平和にまつわる展示は行われてきた。

筆者が関わる前は、市内の市民団体がそれぞれに割り振られたスペースで展示を行っていたケースが多く、概ね全体を括るテーマは設けられず、正直やや雑多にモノが並べられていた印象があった。5月から準備作業を始めた2022年の企画は、その過去とは一線を画し、市の担当者（市民協働課倉内氏、小林氏等）とはコンセプトの擦り合わせから始めた。というのもこの年はこの展示に「平和のつどい」を代替する、市の平和事業の「顔」としての役割が期待されたからである。特に2年間実施されなかった「中学生ヒロシマ平和の旅」も、この年は規模を縮小して開催されることになり、その報告の場も設けられることとなっていた。

旅の報告とのシナジーを図るため、市民協働課ではそのお披露目の場を訪ねる旅程になっていた、広島市立基町高校美術部の『次世代と描く「原爆の絵」』の複製画の借入れをあらかじめ手配していた。さらに旧来行ってきた市民団体のスペースが用意され、そこに今回の企画展示が加わるという訳である。これらの条件を踏まえ、この年の「パネル展示」の主たるターゲットには、再開した「ヒロシマの旅」の報告を見に来る中学生及びその家族（親）世代たちを設定した。そして彼らに展示を通じて何を伝えるべきかを考え、配置を考えた。

中学生たち2000年代後半生まれは、戦争体験者の曾孫世代にあたり、直接的に語られた戦時記憶に出会う経験は著しく乏しい。そもそも親世代に知識や歴史意識が十分でないケースも少なくなく、「戦争＝悲惨」「現代日本＝平和」というステレオタイプが形成されがちである。「ヒロシマの旅」は、市内4校の優秀作文表彰者によるものではあるが、彼らが「見て体験してきたことを報告する」という媒介者の役割を担う点において、その短絡に抗うコミュニケーションが創造される可能性がある⁴。そこで本企画展示においては、彼らの親世代も含め、「そもそも77年前に“終結”した、この国が当事者となった戦争とは何だったのか」について、基本

的な理解を促す構成を考えた。

3-2 2022 年度展示の資料構成

対象を「15 年戦争期」に絞るだけでも様々な異論があり得る。しかし若い世代が「戦争」を具体的に受け止める目的のためには、そのエビデンスを明確にした括りを示す必要がある（もちろん別の括りも可能であるが、その場合はまた別の根拠が必要である）。そこでこの「パネル展示」のターゲットが中学生とその家族であることが重要なポイントとなった。彼らが「戦争」を身近な出来事（自分ごと）として理解するための鍵はなにか——それは「総力戦（＝総動員体制）」すなわち一般市民が戦局にあからさまに巻き込まれていく過程ではないか——と仮置きしてみた。というのも政治史、軍事史といった上からの教科書的目標だけでは、中学生やその両親世代が「自分ごと」と捉える次元と戦争の間には、距離が生れてしまうからだ。

満州事変を起点とする「15 年戦争」論は、確かに「ある特定の視座」に基づく意味を指示するだろう——だがそもそも「戦争を語る」行為自体が、それと避け難く結びついているのだ。戦争資料展示においては、そのメタレベルのコンフリクトにいかん気づき、架橋点を見出せる

かが大切であると筆者は考えている。展示空間における資料と閲覧者の位置の動きやランダムで自由な視線の回遊は、その創出の機会となる。だからこそ展示品とその配列、キャプションの位置とその内容には細心の注意を払うべきなのだ。

その考えを形にする近道として、2022 年の展示は伊勢原市文化財課の所蔵品を中心に構成することとした。なにぶん新たな試みとはいえず、限られた準備期間の中で着実に成果を上げる必要がある。そのために、過去の展示（平成 27（2015）、28（2016）年の「平和資料展」）の目録をベースに、出展可能なものを選び出し、そこに他のソースからの資料を加えて肉付けをするという手順を踏んだ。

そこで頼もしい協力者となったのが、

大磯町郷土資料館である。同館の学芸員である富田三紗子氏は、筆者がデジタルアーカイブ学会の SIG（自主研究会）として立ち上げた「戦争関連資料に関する研究会」のメンバーとして、メタデータ・スキーマの検討の議論に参加し、2021 年に Web 上で開催した「大磯と戦争」展



図 1 2022 年展示のもととなった 2015（平成 27）年展示

の目録データを、研究会事務局が行ったシミュレーションのために共有してくださった。今回の伊勢原の「パネル展示」に際しても、近隣自治体として快く協力に応じてくれた。大磯からの資料の借り入れは、それ自体がメタデータ共有の効用として想定されていたものだ。

大磯以外にも、東海大学水島研究所蔵の資料、さらには『伊勢原市史(資料編・近現代2)』に掲載されている資料もプリントしてこれに加え、目録は完成に向かっていった。

3-3 コーナー、キャプションからメタデータへ

筆者がデジタルアーカイブ学会「戦争関連資料に関する研究会」で示した仮説では、一次資料の「展示」実績はデジタルアーカイブ化作業と極めて密接な関係にある。特に展示コーナー名とキャプションは、メタデータ構造の中心的軸として位置づけられるがゆえに（コーナーは展示品の外延：カテゴリーを指示し、キャプションはコーナーあるいはコレクションを横断して展示品を結ぶ内包：キーワード類のありか＝コンテキストを指示する）、あらかじめ計画段階で考慮することは、作成された展示品に関わる情報（目録、キャプション、コーナー解説文書等）は、メタデータ化作業の軽減に直結する。

このことを踏まえて、2022年の「パネル展示」は、展示品の選考に先立ってコーナーの検討を行い、まず5～6月の準備段階では以下の4コーナーを想定した。

表1 2022年展示の初期のコーナー計画

① 戦争の時代とその前後	時代区分(15年戦争期、以前と戦後)を示す年表と対応する品
② 戦地に赴く～出征とその思い	徴兵関係、出征兵士の装備と関連物品・文書
③ 銃後の日常～総力戦を支える	国防(愛国)婦人会を中心とした、日常生活の意識統制
④ 学校では何を学んでいたか	学校生活に関わる品物・文書、子どもたちの作品など

過去の伊勢原市の展示においては、特に②、③に関わる一次資料(現物、レプリカ)が、十分な背景情報の説明もなく陳列されていた。その反省を下敷きに、2022年の「パネル展示」においては、この「②送り出される側」「③送り出す側」の関係性に注目し、そこに意味論的情報を配するにした。さらにおおよそ展示品が確定した7月末段階でこの①～④のコーナーを各々二分割して以下の8コーナーとし、もともと用意されていた展示台(机とパネル壁)の数ともうまく対応するかたちとなった。

表2 2022年展示の8コーナー解説パネル(※実際の2022年度展示に用いたコーナー解説(筆者文責))

<p>1. 戦争はいつから始まったか</p> <p>私たちが教科書やメディアを通じて知る「日本の戦争は、その多くが昭和19年から20年の出来事で構成されています。しかし「戦争」はある日突然始まったものではありません。空襲や原爆、戦地での虐殺や玉砕などの悲惨で非人道的な体験は、それを避けられない状況に人々を追い込んでいった数々の体制、制度、政策に関する判断の積み重ねの結果であり、またそれは一部の為政者の独断ではなく、それを支える人々の心情や熱狂があつてのことでした。その意味で「戦争の歴史をどこまで遡るべきか」は難しい問いです。細かい戦闘の性質の違いをいう人もいれば、明治維新以降の社会が辿った道がすなわ</p>

<p>ち戦争への足取りに他ならないと考える人もいます。ここでは、軍部独裁と覇権主義の台頭の引き金となった満州事変 1931 年 9 月 18 日を起点とする紛争から終戦、さらには日本国憲法制定・公布：1946 年 11 月 3 日までの約 15 年間で、「戦争の時代」として振り返ることにします。</p>
<p>2. 満州事変から太平洋戦争へ</p> <p>満州事変の発端となった柳条湖事件（1931 年 9 月 18 日：大日本帝国関東軍による自作自演の鉄道爆破事件）は、満州中国東北部に対する権益意識の高揚が直接的な引き金となりました。日露戦争以降、国策に大衆心理を巻き込んでいくようになった日本政府は、特に遼東半島の租借権獲得と南満州鉄道敷設（1906）、さらに韓国併合（1910）を経て東アジアへの膨張政策の布石が用意されると、欧米列強の植民地主義に抵抗する「大義」を謳うようになります。しかしその実態は、自らの優越性を疑わない独善でした。それでも世界恐慌（1929）による農村の疲弊で活力を失った民衆は、「移民」に「五族協和」の夢をつなぎ、日中開戦（1937）を経て広がった「八紘一宇」「大東亜共栄圏」のスローガンに希望を託したのです。一方、国際連盟脱退（1933）以降孤立化が進み、物資供給源を絶たれ、肥大する軍事費を支えられなくなった日本経済は、対米開戦という選択に追い込まれていきます。</p>
<p>3. 兵士のいでたち</p> <p>男性の戦争体験者の多くは、少年時代に兵隊に憧れた記憶を語りました。特に海軍の夏の白軍服、陸軍士官学校の制服など、そのいでたちが羨望の的だったそうです。当時の少年たちは、「制服」「軍服」をシンボルとして、出征し軍功を上げることを、ロールモデルとして心に刻んでいきますが、同時にそれは軍隊組織が、子どもの精神的な発達段階や地域における日常生活規範に浸透していたことの証でもありました。現在の「制服」にも、そうした機能の名残りが残っています。しかし実際は、階級章などが重要な意味をもつ将校以上の制服を除くと、下士官や一般兵の軍服は戦闘目的に最適化された、本来合理性が追求された「軍装」としてデザインされたはずのもので、今日歴史資料として見るべきもう一つの視点は、そこにあるといえます。</p>
<p>4. 徴兵検査から入営へ</p> <p>戦時期の日本では、男子には満 20 歳になると、兵士になる義務がありました。昭和 2 年の改訂兵役法の制定で国民総動員体制が進められて以降、全員が徴兵検査身長、体重測定、性病検査などを受け、体格の良い順に甲種、乙種、丙種の三種に分けられました。徴兵検査後、甲・乙種合格をしたものの中から現役兵に選ばれた者に交付される現役兵証書を携帯し、入営軍隊入りすることになる一方、丙種は恥とされる差別意識が醸成されました。徴兵の範囲は、大戦末期には国内全域から領有地の朝鮮・台湾に及びました。各市町村では、この徴兵のための名簿作成、留守家族への扶助、戦没者の葬儀や慰霊など、いわゆる兵事業務が大きな位置を占めるようになり、今日でも兵事関係の公文書は戦時下の生活を知るための貴重な資料となっています。</p>
<p>5. さまざまな銃後組織</p> <p>銃後は戦場の後方を意味しますが、この時代は戦闘に加わらない一般国民生活全般を指しており、まさに総力戦体制の考え方が表れています。代表的なものには全国的な組織となった在郷軍人会（1910 年発足：現役を離れた軍人が予備役に備える組織）愛国婦人会（1917 年発足）大日本国防 婦人会（1932 年発足：のちに各種婦人会は合流）などがあり、前者は徴兵検査、式典協力、入営者の予習訓練も担当、</p>

後者は出征兵士の送迎、傷病兵・遺骨の出迎え、寄付、慰問袋の作成などを行い、戦争と日常をつなぐ中間組織となりました。満州事変は、これら銃後組織活発化の転機となりました。初期の「移民」の中心は在郷軍人であり、「別れ」は次第にイベント化していきます。また日中開戦以降戦地が拡大すると、召集令状 在郷軍人への赤紙は民衆に緊張を与えました。さらに1937年4月公布の防空法によって「隣組」が組織されます。銃後は「守り」の側面が強調され、様々な統制が行われるようになります。

6. 物資不足と生活統制

日中開戦後の戦時体制のもと、昭和13年1938年4月に「国家総動員法」が公布されました。これはあらゆる経済活動、国民生活を戦争目的に収斂させるために、国家による統制を図ろうとした法律です。当初対象は綿糸・ガソリン・重油などの原材料に限られていましたが、戦争の長期化で日常生活に波及。不足する物資確保のために実施された配給制度は、昭和15年(1940)に砂糖・マッチが配給制となってから広がり、米穀をはじめとする主要食糧や必需品も、やがて配給を通じてしか入手できなくなります。特に米の配給は昭和19年(1944)には1か月に10日分程度の量に減配され、いも類、豆がすなどを代用とし、その他食料となるあらゆる物をいっしょに炊き込んだ雑炊・すいとんを常食として空腹をしのぎました。統制の裏をくぐって周辺農家へ買い出しに出る人も多く、終戦前には飢餓状態に近いになります。戦争が終わっても、物資不足は解消せず、戦後の混乱の中で飢えは続きます。

7. 学校生活

1900年に公布された改正小学校令で、尋常4年高等2年と定められていた昭和初期の小学校には、「奉安殿」と呼ばれる施設があり、「御真影」や「教育勅語」が安置され、国民精神を支える学校で最も神聖な場所として最大の敬意と注意が払われていました。そこに1941年(昭和16年)4月国民学校令が施行されると小学校は国民学校と改称され、総力戦体制に対応し「言行一致・心身一体の皇国民錬成」(国民精神を体認し、国体に対する確固たる信念を有し、皇国の使命に対する自覚を有すること)の目的を強化した機関に変わります。子どもたちは少国民と呼ばれ、教科書も一新。国民科(修身・国語・国史・地理)、理科科(算数・理科)、体錬科(体操・武道)、芸能科(音楽・習字・図画・工作)に加え、女子は裁縫・家事、高等科では実業も加わり「献身奉公」「職業報国」の実践力を身につけることが求められました。木銃などを用いた軍事教練(女子はなぎなた訓練・救護訓練・看護訓練)も行われました。

8. 子どもたちの心の中

子どもたちは、暮らしの隅々までが国家と一体となって戦争に邁進する「挙国一致」「尽忠報国」のローガンの中で育っていきます。学校にとどまらず、家庭や日常生活など、あらゆる場面で、善悪の判断や、規範とすべき考え方は貫かれ、成長とともに身につけていくことになります。例えば両親の手伝いや、地域で誰にどのように敬意を払うべきなのか、あるいは子どもたち同士の遊びでも、勝ち負けや描かれている情景の中に強く戦時色はあらわれ、男子は当然のように「兵隊に憧れ」、女子は「良妻賢母になろう」と努力をします。当時の子どもたちが書き記した日記や、戦地に送られた作文などの慰問の品には、そうした時代の彼らの「心」を垣間見ることができます。しかし終戦後、「教科書の墨塗り」が行われるなど学校教育は機能不全となり、子どもたちはさまざまところで混乱状況に直面します。こうした社会の激変が彼らの「心」にどう刻まれたかも、「戦争」の記憶とともに考えてみたい問題です。



写真1 2022年展示全景と各コーナー

4. 伊勢原市「平和を祈念するパネル展示」(2023年)の開催

4-1 2023年度展示企画のコンセプト

2022年度の「平和を祈念するパネル展示」の好評を受け、伊勢原市は次年度の企画継続を決め、新年度に入って早々に引き続きの協力を筆者に求めた。そこでこの「パネル展示」のスキームを2～3パターン用意し「モデル化」し、データのアーカイブ化とともに将来にわたって巡回あるいは繰り返し開催できるよう提案し、合意に至った(担当は倉内氏と龍氏)。

2023年度は、その展開イメージを具体化する方向で検討することになったが、前年度のどちらかといえば「入門的」なストーリーから発展させ、今回はテーマ性を表に出していくことにした。というのも、まず(前年の大磯町に続き)近隣自治体として平塚市との連携が可能性として浮かびあがったからだ。2019年度まで市内中学校に勤務し「ヒロシマの旅」に同行した石野正樹教諭は、翌年に平塚中等教育学校に転勤後も、伊勢原時代に得た経験と知見を活かし、新しい環境で平和教育を推進してきた。その実績を携えて協力を申し出てきたのである。

それは平和事業を自治体の枠組みから開いていく契機となり、「展示」は資料を媒介に「地域」という平面を拡張し、意味解釈の広がりや創出する装置となった。さらにそれに加え、伊勢原市の平和事業の「過去」の記録やパブリックな公開資料とのリンクが織り込まれるようになった。時間・空間の広がり、そして社会組織的な地層を重ねる立体的構造が、この展示に期待されるようになったのである。

その声に応えるべく設定されたテーマが「空襲」である。筆者も『戦争をいかに語り継ぐか』以降、具体的な「戦争関連資料」問題を考える手がかりとしてフォーカスしてきたのが「空襲」であった。全国200ヵ所以上の地域が被災し、その記憶を継承しようという活動が各地に存在している。またその事象自体が非対称である(落とされた側にとってみれば「空襲」、落とした側にとっては「空爆」という、20世紀の戦争の核心に迫る問題を提起している――こ

の点は総動員体制の形成に通底する⁵。

しかし伊勢原市と「空襲」との距離感には実に微妙である。隣接する平塚市は大規模空襲を経験した町であり、伊勢原市南部に住む高齢者の中には、遠くからその様子を見ていた記憶を持つ人は少なくない。また機銃掃射の犠牲者についても語り継がれている物語がいくつかある。しかしいわゆる「焼け野原」の経験はない。一方、平和事業が始まった当初から「核廃絶」は宣言の中心に据えられており、中学生はヒロシマを体験し、また被爆者の会も市民団体の中で指導的な役割を果たしてきた—だからこそ逆説的ではあるが、伊勢原で「空襲」を考えることは、戦争を取り巻く多様な言説をつなぐ契機になりうる。

4-2 2023 年度展示コーナーと技術的な工夫

前年行った手順に従って、2023 年 6 月には大まかなコーナーコンセプトを固め、展示品の選出作業を開始した。当初から意識をしたわけではないが、前年よりも既存公開資料や証言、映像などの視覚資料を広く参照したため、現物よりも複製資料の点数が多くなったことが特徴である。そのベースには、協力を仰いだ平塚市博物館（浜野達也館長をはじめとした方々）の長年にわたる証言収集や統計的な調査の集積成果があったことに触れずにはいられないだろう。

このように 2023 年度の「パネル展」は、多様な社会教育機関やメディアの資料に当たることにより（国立公文書館や国立国会図書館の公開資料の活用、東京新聞・毎日新聞・タウンニュース社の記事など）、現物・一次資料が与える感覚的なインパクトよりも、客観的かつ史的検証の蓄積を踏まえた「解釈」の提示に軸足を若干シフトした。そしてそこに市民協働課に残された過去の「平和事業」の記録、平塚中等教育学校の生徒の活動記録、伊勢原市図書館の収蔵図書、伊勢原市文化財課資料、水島研究室所蔵資料が加わり、ラインナップが整えられたのである。

表 3 2023 年展示の 8 コーナー解説パネル（※実際の 2022 年度展示に用いたコーナー解説（筆者文責））

<p>① 空襲と空爆—被害と加害</p> <p>18 世紀末、気球の戦争利用が「空からの攻撃」の始まりといわれていますが、20 世紀に入り飛行機が開発されると一気に本格化します。第一次世界大戦の戦闘の市民への拡大、第二次世界大戦の総力戦化は間違いなく「空襲／空爆」が引き金となったものです。</p> <p>同じ一つの出来事でありながら、「攻撃を加える側＝空爆」「爆撃を受ける側＝空襲」という別の言葉で語られることが、この行為の非人道性と理屈の合わなさ（矛盾）を表しているといえます。なぜこのような残酷な行為が正当化されたのでしょうか。</p>
<p>② 防空思想と総動員体制</p> <p>満州事変以降、人びとは「空」を戦場として強く意識するようになり、日中戦争が始まると「戦略爆撃」論には、実践の色あいが急速に加わっていきます。各地で防空演習が行われ、その理論書や啓発ポスター、記録映像なども数多くのこされるようになります。</p>

<p>防空の備えは、在郷軍人会、愛国婦人会などの銃後組織によって日常生活の規範となっていました。しかし、爆撃の現実感のないところで行われる訓練や装備には、徐々に精神論的要素が強まっています。</p>
<p>③ 7.16 平塚空襲—都市爆撃の実相</p> <p>1945年7月16日深夜から未明にかけて、伊勢原の隣町・平塚は133機のB29による爆撃で壊滅的な被害を受けます。死者363人以上（7575%が身体に直撃）、全焼8,263戸、当時の平塚市と大野町（のちに合併）の6060%の人が焼け出されました。</p> <p>米軍は6月17日以降、大都市空襲の次の段階として中小都市市街地の夜間空襲に入っており、1度に33～4都市（大分、桑名と同日）が襲撃されました。この空襲は旧平塚市中心部に爆撃中心部をおいた空襲でしたが、実際は、東西では小田原～茅ヶ崎の範囲にも投弾があり、北は伊勢原市高部屋にも焼失被害があったと記録されています。</p>
<p>④ 市民が体験した平塚空襲</p> <p>平塚は、市北部の第二海軍火薬廠や軍用機を生産する日本国際航空工業を中心とした軍需工場が多く建てられた「工都」であり、まさに米軍としては順次攻撃すべき都市でした。また攻撃対象もみつめやすく、空襲の密度、投下焼夷弾は大量となり、攻撃100分で、街には高い火柱が上がり、焼き尽くされました。</p> <p>中心部に住む人々は工場に阻まれ、主に東西と南に避難しましたが、伊勢原から通勤していた人もおり、その避難の証言も残されています。また空襲に対する火器や反撃する航空機もほとんどなく、一般市民は抗戦力がほとんどなくなった自軍の現実をまざまざと見せつけられました。</p>
<p>⑤ 伊勢原と「空襲」</p> <p>伊勢原は今でこそ平塚市と隣接していますが、戦後（昭和31年の大合併の前は間には豊田村、大野村などの田園地域を挟んでおり、互いの市街地は離れていたため、伊勢原の人々にとって空襲は遠くの出来事であり、そのような証言もいくつか残っています。</p> <p>しかし実際には、現在の伊勢原市内でも投下された焼夷弾は発見されており、また、7月16日の本空襲以降も、7月30日、8月7日など、県中西部では広域で焼夷弾の投下や機銃掃射が行われたことが記憶・記録に残されています。</p>
<p>⑥ 記憶に残る物語</p> <p>伊勢原市では、戦後70年の2015年から、市内・市ゆかりの戦争体験者の記憶をインタビュー映像の残す事業を続けてきました。伊勢原市が20152015～17年の間に収録した戦争体験者インタビュー（10名）の映像の中にも、「空襲の記憶」が語られたシーンがいくつもあります。</p> <p>その多くは「機銃掃射」による被害・犠牲者にまつわる物語ですが、伊勢原の市民の心に戦争の悲惨さ・理不尽さを刻み込む出来事でした。</p>
<p>⑦ 原爆を知る—伊勢原市被爆者の会の活動</p> <p>2018年度と19年度は、伊勢原市被爆者の会の方々を対象にインタビュー映像を収録しました。中でも会長の大盛一郎さん、副会長の小淵義信さんは、90歳を越えた現在も勢力的に原爆の記憶を伝える活動を続けています。</p>

2023年7月も、今年度広島に行く「中学生ヒロシマ平和の旅派遣団」の事前学習にて、世代を超え、思いをつなぐ対話ワークショップが行われました。

⑧ 中学生は広島で何を見たか

「中学生ヒロシマ平和の旅」は、伊勢原市が「平和都市宣言」を発表した翌々年の平成7年から始まりました。平和記念式典参列や原爆資料館の見学だけでなく、近年は平和記念公演を出て、市内の被爆遺構を訪ねたり、他県から広島に訪れた中高生たちとのディスカッションを行ったり、活動が広がっています。

各中学の代表者で構成される派遣団の生徒たちは、伊勢原に戻って「平和のつどい」やパネル展示、あるいは各校で自分たちの体験を伝える役割も担っています。彼らは、広島から、伊勢原の空に何を持ち帰ってきたのでしょうか。

2023年度のコーナー解説文は、この様に前年度よりは若干簡潔となったが、それは展示品に文章や映像など情報量が多い資料が増えたためである。特に導入部(①)のコーナーにおける図書展示は、「空襲／空爆」戦略を基礎づけるドゥーエ理論から重慶・ドゥーリトル空襲の実相を経て本土空襲に広がる流れを示す重要書籍を、市図書館から借りだし、揃えることができた。しかしそれ以降は、実際に掲示されるパネル面積では十分ではなく、出会った情報をきっかけに、さらに詳しく知りたい／考えたい人のためにリンクを辿れるような工夫が必要であると考えるに至った。そこでQRコードを組み込んだ展示パネルを用意することとなった。

QRコードをキャプチャすると「コーナー②防空思想と総動員体制」の「221. 空襲・防空関係図書(1930～45)(国立国会図書館デジタルコレクション・検索結果)」「222.防空圖解第一輯『一般防空』(国立公文書館デジタルアーカイブ)」のWebページが開き、スマートフォンで詳細情報が閲覧できるという仕掛けである。こうした公開されたデジタル資料は、同じくWebに記された権利上の留意点も確認した上で、展示キャプションにも表示した。

また2023年度展示では、映像も積極的に活用した。「コーナー②防空思想と総動員体制」では「233.「夕張町防空大演習」」の映像を、また「コーナー⑤伊勢原と「空襲」」では「531. 看護師の記憶 ～「死なばもろとも」歩いた10キロ(冨田フサ子さんインタビュー)」の映像を、タブレットPCを置いてループ再生を行い、その一部サムネイルや書き起こし記事を展示した。また、「コーナー⑥記憶に残る物語」「コーナー⑦原爆を知るー伊勢原市被爆者の会の活動」「コーナー⑧中学生は広島で何を見たかー中学生ヒロシマ平和の旅」では、過去に水島研究室が制作した映像のサムネイルを展示、別室で行った映像上映へ導線を設えた。

※なお、2023年展示においては、展示品のデジタルアーカイブ化作業も並行して行った(展示品の撮影とキャプションの入力)⁶。

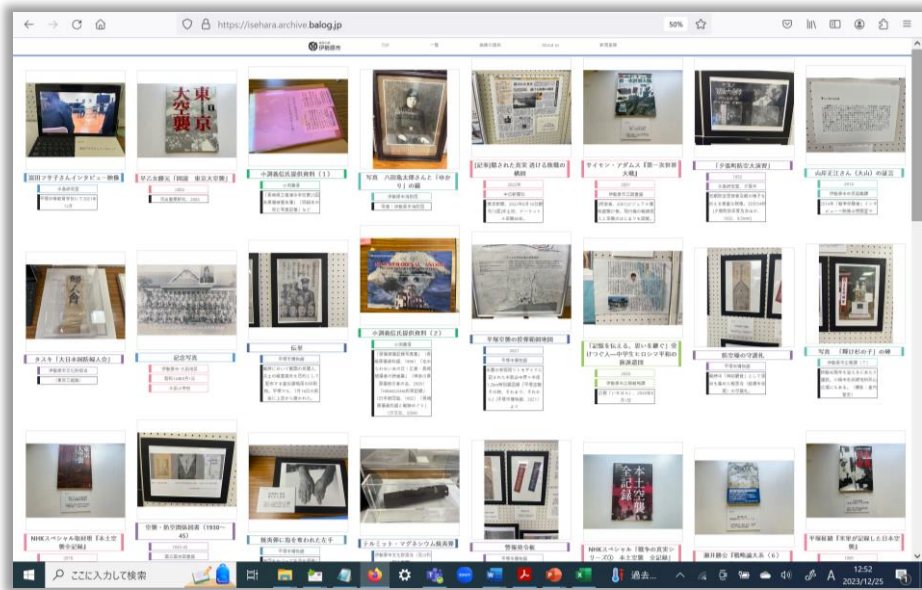


写真2 2023年展示資料を入力したデジタルアーカイブサイト <https://isehara.archive.balog.jp/>

4-3 見てきた伊勢原市「平和事業」の全体像

「コーナー⑥記憶に残る物語」～「コーナー⑧中学生は広島で何を見たか」は、主に映像記録（サムネイル）と市民協働課がファイリングしていた資料を用い、さながら過去の「平和事業」をダイジェストするような展示スペースとなった。⑥では、2014年度からのインタビュー映像、さらには現在進行形で行われているシリーズ「映像記録：伝えたい想いにのせて」の中に記録された伊勢原市内の空襲（主に機銃掃射）のエピソードが、⑦では「被爆者の会」の活動（映像サムネイル）及び大盛一郎会長、小淵義信副会長からの提供資料が、⑧では「中学生ヒロシマ平和の旅」を経験し東海大学生となった学生による過去の「旅」のサマリーと、2023年度の「旅」の資料が並んだ。奇しくも、再開した「旅」の意義を再確認するために、2023年度の「旅」の事前学習は、大盛氏、小淵氏を交えてのワークショップとなった。これまでバラバラに見えていたアクションが、少しずつ相互につながり始めていた。

振り返れば伊勢原市の「平和事業」の全体像は、年表こそ Web サイトにも公開されているが、その「歴史」が総括され、まとめて提示されたことは筆者が知る限りない。1993年12月に「伊勢原市平和都市宣言」が議決され、翌年（94年）その啓発活動がスタート。さらに翌95年に初めての「中学生ヒロシマ平和の旅」が挙行されるようになっておよそ30年。ちょうど「節目」となる年の展示が、これまでの様々な活動の関係性を見つめ直すきっかけとなったことは偶然とはいえ、時宜を得たものであったことは間違いない。惜しむらくは、そのことを十分に広報できなかった点にある。本稿を含め、2024年度の計画に向けてその「像」を、市民をはじめとした関心を抱く人々と、いかに幅広く共有できるかが課題となろう。

5. 展示と資料保存、メタデータ・スキーマの策定に関する知見

ここで本「研究ノート」当初の問題提起——「アーカイブ」を論じる際の、特にデジタル技術との関係に言及する際の、本来の主題である「誰の、何のための」という問いに立ち返りたい。それには権威主義的な記録の集積ではない、市民に開かれ、主体的にアクセスする「仕組み」「考え方」が必要だ——と筆者は述べた。この普遍的な問いと、伊勢原市という小さな自治体で行ってきた実践との間には、大きなギャップがあるように感じられるかもしれない。しかしその距離をメタデータ・スキーマが媒介することで、少しずつ埋めていくという考え方についてはどうだろうか。

「展示」と「デジタルアーカイブ」には、構造的という観点で捉え返すと多くの共通項を見出すことが可能になる。それが現物（一次）資料であれ複製やネットワークを介した参照（二次）資料であれ、「モノとことば」の接続が指し示しあう「記号の矢（index=LODのアーキ）」の意味の契機としての役割は、思考のヴァーチャルと生きる（経験する、認識する）リアルとの間を行き来する回路を保証する⁷。そしてそれらを閲覧する／回遊する行為は、その場にせよ、事後的にせよ、そこから生まれる発話を「記号の矢」の延長線上に指示し、対話の創出に貢献するだろう。本来、資料の保存は闇雲になされるものではなく、このような構造が織りなす関係性（スキーマ）を意識しつつ行われるべきなのだ。

ネット言説の疑似セオリーになってしまった「まずは党派性ありき」と「アテンション・エコノミー」のダブルバインドから脱する道も、そのヒントはデジタル環境にある。しかしそれは生成AIの様に、情報のオートノミーに軸足を置いては可視化されないだろう。残念ながら（皮肉にも）戦争を考えることは、その入り口になる。それは「理不尽な命の奪い合いの組織化」という、オートノミーの究極の姿を対象化させるからだ。

2023年末時点、愛と平和を祈るべき聖地で、戦禍が止まない現実が続いている。こうした歴史の皮肉と真摯に向き合うには、学問の領野にも、愚直なる実践と接続する新しい方法が必要なのである。

【付録1】2022年展示の目録

2022年度伊勢原市「平和を祈念するパネル展示」（平和史料）目録			
1 戦争はいつから始まったか			
101	15年戦争年表	浜州事変(1931)から15年間の出来事に『伊勢原市史』文書を照合。	水島研究室
102	忠魂碑・出征記念碑	伊勢原には多く地域にの忠魂碑や出征を記念する石碑が残されている。	水島研究室／伊勢原市民協働課
103	日清・日露戦争資料(1)	日清の夜襲海軍戦大/バラマ関く上野/バラマ館/浅草西島経金上印刷所>	伊勢原市文化財担当
104	日清・日露戦争資料(2)	明治卅七八年戦役従軍章。	伊勢原市文化財担当
105	日清・日露戦争資料(3)	戦役寄付金額奨状。①<明治27、28年>②<明治37、38年> <神奈川県知事>より	伊勢原市文化財担当
106	日清・日露戦争資料(4)	八幡神社皇軍全勝軍人健全祈禱御堂。日露戦役の軍功が裏面に記載。	伊勢原市文化財担当
2 浜州事変から太平洋戦争へ			
201	【書籍展示】浜州移民について	(略)	水島研究室
202	① 日中戦争資料(1)	支那事変戦時経済要綱(事變勃発3月12月下旬迄/閣) 通称第六十四號附録<昭和13年1月5日><陸軍省新聞班/海軍省海軍軍事普及部>	伊勢原市文化財担当
	② 日中戦争資料(2)	支那事變第一年戦時経済要綱 通称第九十號附録<昭和十三年六月下旬状況><陸軍省新聞班/海軍省海軍軍事普及部>	伊勢原市文化財担当
203	日中戦争資料(3)	支那事変従軍勳章2種 <通幣局製>	伊勢原市文化財担当
204	雑誌『サンデー毎日』	サンデー毎日支那事変特集号<昭和12年11月15日発行>	伊勢原市文化財担当
3 兵士のいでたち			
301	① 軍服上のみ	昭和一年制式、九八式軍衣と思われる<昭和16年製>	伊勢原市文化財担当
	② 軍服下のみ	陸軍 昭五式軍袴と思われる<昭和12年製>	伊勢原市文化財担当
302	① 軍用品(水筒)(1)	昭五式水筒 陸軍下士官用	伊勢原市文化財担当
	② 軍用品(水筒)(2)	海軍用水筒	伊勢原市文化財担当
	③ 軍用品(飯盒)	口号飯盒	伊勢原市文化財担当
	④ 軍用品(ゲートル)	騎兵または将校用の革製脚絆(きゃはん)	伊勢原市文化財担当
303	① 軍用品(鉄兜)	九〇式鉄帽	伊勢原市文化財担当
	② 軍用品(陶製手榴弾)	海軍製 手榴弾四型 物資の不足により、本来金属製の弾殻を陶器で代用	伊勢原市文化財担当
304	【書籍展示】軍装について	(略)	水島研究室
4 徴兵検査から入營へ			
401	① 徴兵検査関係文書(1)	昭和十一年度徴兵検査及抽選/日時并々徴兵署/場所/徴兵署出頭に関する注意<昭和11年><比々多村差出>	伊勢原市文化財担当
	② 徴兵検査関係文書(2)	常備上二階スル注意<昭和11年頃><比々多村差出>	伊勢原市文化財担当
	③ 徴兵検査関係文書(3)	徴兵検査と兵役関係一覽圖、壮丁の心得等注意事項<岐阜師団司令部>	伊勢原市文化財担当
402	出征記念品(日軍旗)	海軍の技術士官ら上官・同僚に加え、多くの激動の言葉が寄せられている	伊勢原市文化財担当
403	出征兵士を送る旗	<茶屋裏側店> 材質:紙	大磯町郷土資料館
404	絵はがき(軍隊生活)	<小野寺秋風園、武備書店発行>入營から除隊までの軍隊中の生活を会話を交えてマンガ的に紹介。	伊勢原市文化財担当
405	記念写真(出征時)	比々多村	伊勢原市文化財担当
406	① 入營に関する記録(1)	徴兵検査から横須賀重砲兵隊に入營するまでの記録(会合、祝儀、見舞などの一覽)<昭和11~12年>	伊勢原市文化財担当
	② 入營に関する記録(2)	入營後の時々のあいさつ①入營一年後(軍中)の挨拶<昭和11年2月>、②新緑の挨拶(戦地)に挨拶 <昭和13年5月>	伊勢原市文化財担当
	③ 軍人御守	大山寺守札(①軍人健全不動尊守護②開運御守③『大山御供』、陣守(『奉加妙峰神口』))、奥山半僧坊軍人御守、大雄山御守	伊勢原市文化財担当
407	軍事郵便	差出人は、第3軍第1師団陸兵第1第3中隊に所属<1904年(明治37)10月8日>	大磯町郷土資料館
5 さあどまな戦後組織			
501	【書籍展示】在郷軍人会・大日本国防婦人会	(略)	水島研究室
502	タスキ(大日本国防婦人会)	<東京三越製>	伊勢原市文化財担当
503	愛国婦人会双六	愛国婦人会の活動内容を、双六で紹介 <1934年(昭和9)>	大磯町郷土資料館
504	① 奉公袋	召集の際に兵士が持参する袋	伊勢原市文化財担当
	② 軍隊手帳	所属する連隊や経歴、天皇が直接下した軍人勅諭、行動規範を示した戦時訓などが記されている。	伊勢原市文化財担当
	③ 雑誌『訓練』	<帝國在郷軍人会本部発行><1928年(昭和3)11・12月号/ 1929年(昭和4)1月号>	大磯町郷土資料館
	④ 通達文書(献納活動)	『大山町における日中戦争開始一周年記念一戸一品献納運動』<昭和13年6月>	伊勢原市史
505	千人針	武漢長久(戦いで)の幸運が長く続くの文字	伊勢原市文化財担当
6 物資不足と生活維持			
601	① 陶製ガスコンロ	物資不足により鉄の代用として使用。	大磯町郷土資料館
	② 代用品(鏡餅)	食糧不足から陶製の代用品として使われた鏡餅。	大磯町郷土資料館
603	通達文書(服装簡素化)	『比々多村服装簡素化徹底事項』<昭和18年>	伊勢原市史
604	通達文書(灯火管制)	『昭和十二年度関東防空演習比々多村防備団に関する協議会開催通知』<昭和12年8月>	伊勢原市史
605	防空用品(消火弾)	空襲の際、避避せず消火に努めることが推奨された。<大日本防火協会製>	大磯町郷土資料館
606	① 雑誌『婦人倶楽部』	大日本婦人会談話社発行<昭和19年1月号>	水島研究室／伊勢原市民協働課
	② 雑誌『富士』	大日本婦人会談話社発行	水島研究室／伊勢原市民協働課
	③ 雑誌『日の出』	新潮社発行	水島研究室／伊勢原市民協働課
7 学校生活			
701	① 旧制中学制服(1)	<官公製>(今日の学生服のブランドカンコーの前身)	伊勢原市民協働課
	② 旧制中学制服(2)	旧制厚木中学制服 <神奈川県厚木商業組合> <昭和13年>	伊勢原市民協働課
702	愛国絵筆	HE	伊勢原市文化財担当
703	尋常小学校教科書(修身)	第四期固定修身教科書<1939年(昭和14)>	大磯町郷土資料館
704	体験者インタビュー	亀井フジエさん(昭和8年生:大田)、山岸正江さん(昭和11年:大山)の小学生(戦時下)の記憶。<2015、2016年収録>	水島研究室／伊勢原市民協働課
705	大田小学校創立記念誌	<90周年(昭和39年)、100周年(昭和49年)>	伊勢原市民協働課
8 子どもたちの心の中心			
801	① 児童による慰問品(1)	作文、習字(比々多尋常高等小学校四学年)<昭和12、13年>	伊勢原市文化財担当
	② 児童による慰問品(2)	児童画(比々多尋常高等小学校四学年)<昭和12、13年>	伊勢原市文化財担当
802	戦時期女子学生の日記と絵画	<田中昭子>大塚在住高等女学校2年生、1929年生まれ(伊勢原市議員の祖母)、<1943年9月1日~2月29日(11月22日~12月28日欠席)>。	水島研究室／伊勢原市民協働課

【付録2】2023年展示の目録

令和5年度伊勢原市「平和を祈念するパネル展示」（特展：「空襲から平和を考える」）目録

1. 空襲とは何かを知る	
111	空襲被害者「伊勢原市」
112	伊勢原市立図書館
113	伊勢原市立図書館
114	伊勢原市立図書館
115	伊勢原市立図書館
116	伊勢原市立図書館
117	伊勢原市立図書館
118	伊勢原市立図書館
119	伊勢原市立図書館
120	伊勢原市立図書館
121	毎日新聞社
122	毎日新聞社
123	毎日新聞社
124	毎日新聞社
125	毎日新聞社
126	毎日新聞社
127	毎日新聞社
128	毎日新聞社
129	毎日新聞社
130	毎日新聞社
131	毎日新聞社
132	毎日新聞社
133	毎日新聞社
134	毎日新聞社
135	毎日新聞社
136	毎日新聞社
137	毎日新聞社
138	毎日新聞社
139	毎日新聞社
140	毎日新聞社
141	毎日新聞社
142	毎日新聞社
143	毎日新聞社
144	毎日新聞社
145	毎日新聞社
146	毎日新聞社
147	毎日新聞社
148	毎日新聞社
149	毎日新聞社
150	毎日新聞社
151	毎日新聞社
152	毎日新聞社
153	毎日新聞社
154	毎日新聞社
155	毎日新聞社
156	毎日新聞社
157	毎日新聞社
158	毎日新聞社
159	毎日新聞社
160	毎日新聞社
161	毎日新聞社
162	毎日新聞社
163	毎日新聞社
164	毎日新聞社
165	毎日新聞社
166	毎日新聞社
167	毎日新聞社
168	毎日新聞社
169	毎日新聞社
170	毎日新聞社
171	毎日新聞社
172	毎日新聞社
173	毎日新聞社
174	毎日新聞社
175	毎日新聞社
176	毎日新聞社
177	毎日新聞社
178	毎日新聞社
179	毎日新聞社
180	毎日新聞社
181	毎日新聞社
182	毎日新聞社
183	毎日新聞社
184	毎日新聞社
185	毎日新聞社
186	毎日新聞社
187	毎日新聞社
188	毎日新聞社
189	毎日新聞社
190	毎日新聞社
191	毎日新聞社
192	毎日新聞社
193	毎日新聞社
194	毎日新聞社
195	毎日新聞社
196	毎日新聞社
197	毎日新聞社
198	毎日新聞社
199	毎日新聞社
200	毎日新聞社

2. 伊勢原で空襲を上げる	
201	伊勢原市立図書館
202	伊勢原市立図書館
203	伊勢原市立図書館
204	伊勢原市立図書館
205	伊勢原市立図書館
206	伊勢原市立図書館
207	伊勢原市立図書館
208	伊勢原市立図書館
209	伊勢原市立図書館
210	伊勢原市立図書館
211	伊勢原市立図書館
212	伊勢原市立図書館
213	伊勢原市立図書館
214	伊勢原市立図書館
215	伊勢原市立図書館
216	伊勢原市立図書館
217	伊勢原市立図書館
218	伊勢原市立図書館
219	伊勢原市立図書館
220	伊勢原市立図書館
221	伊勢原市立図書館
222	伊勢原市立図書館
223	伊勢原市立図書館
224	伊勢原市立図書館
225	伊勢原市立図書館
226	伊勢原市立図書館
227	伊勢原市立図書館
228	伊勢原市立図書館
229	伊勢原市立図書館
230	伊勢原市立図書館
231	伊勢原市立図書館
232	伊勢原市立図書館
233	伊勢原市立図書館
234	伊勢原市立図書館
235	伊勢原市立図書館
236	伊勢原市立図書館
237	伊勢原市立図書館
238	伊勢原市立図書館
239	伊勢原市立図書館
240	伊勢原市立図書館
241	伊勢原市立図書館
242	伊勢原市立図書館
243	伊勢原市立図書館
244	伊勢原市立図書館
245	伊勢原市立図書館
246	伊勢原市立図書館
247	伊勢原市立図書館
248	伊勢原市立図書館
249	伊勢原市立図書館
250	伊勢原市立図書館
251	伊勢原市立図書館
252	伊勢原市立図書館
253	伊勢原市立図書館
254	伊勢原市立図書館
255	伊勢原市立図書館
256	伊勢原市立図書館
257	伊勢原市立図書館
258	伊勢原市立図書館
259	伊勢原市立図書館
260	伊勢原市立図書館
261	伊勢原市立図書館
262	伊勢原市立図書館
263	伊勢原市立図書館
264	伊勢原市立図書館
265	伊勢原市立図書館
266	伊勢原市立図書館
267	伊勢原市立図書館
268	伊勢原市立図書館
269	伊勢原市立図書館
270	伊勢原市立図書館
271	伊勢原市立図書館
272	伊勢原市立図書館
273	伊勢原市立図書館
274	伊勢原市立図書館
275	伊勢原市立図書館
276	伊勢原市立図書館
277	伊勢原市立図書館
278	伊勢原市立図書館
279	伊勢原市立図書館
280	伊勢原市立図書館
281	伊勢原市立図書館
282	伊勢原市立図書館
283	伊勢原市立図書館
284	伊勢原市立図書館
285	伊勢原市立図書館
286	伊勢原市立図書館
287	伊勢原市立図書館
288	伊勢原市立図書館
289	伊勢原市立図書館
290	伊勢原市立図書館
291	伊勢原市立図書館
292	伊勢原市立図書館
293	伊勢原市立図書館
294	伊勢原市立図書館
295	伊勢原市立図書館
296	伊勢原市立図書館
297	伊勢原市立図書館
298	伊勢原市立図書館
299	伊勢原市立図書館
300	伊勢原市立図書館

【付録3】2022年展示（左）、2023年展示（右）のキャプションプレート

401-2 徴兵検査関係文書（2）

常識上二階スル注意
 <昭和11年頃><比々多村出>
 「常識上ノ諸問ニ對スル應答出來ザルモノ
 往々アリ」 「恥ツベキ」とあり 県知事、司令官、村長、小学校長などの名が記されている。
 ◆伊勢原市文化財担当

401-3 徴兵検査関係文書（3）

徴兵検査と兵役関係一覽圖、社丁の心得
 並注意事項
 <岐阜聯隊區司令部>
 模範解答が示し諸問の予習を促している
 ◆伊勢原市文化財担当

No.123

[公文書]
 昭和二十年・空襲被害
 状況報告

各地方核事正ヨリ司法大臣宛ノモノ（国立公文書館デジタルアーカイブ）※QRコードから国立公文書館サイトに飛びます。

No.311

平塚空襲の投弾範囲地図

米軍の参照用リモザイクに記された半
 数必中炸弾半径1.2km 特別展図録『平塚
 空襲 その時、それまで、それから』（平
 塚市博物館、2021）より

■2022年展示では、後でメタデータをシステム入力することを考え、時間・空間データをく>で括った。

■2023年展示のQRコード活用とクリエイティブコモンズ表示の例。

註

- 1 伊勢原市の平和事業は1985（昭和60）年に議決された「健康・文化都市宣言」と、1993（平成5）年に議決された「伊勢原市平和都市宣言」を契機に、様々な啓発、教育普及事業を展開しているもの。水島研究室は、2014年度より主に平和史料収集・公開事業を中心に協働を始め、現在ほぼ全事業に何らかの関与をしている。
<https://www.city.isehara.kanagawa.jp/docs/2021122700041/>
- 2 「質問が通じない」「答えが理解できない」聞き手と語り手双方が戸惑う状況に積極的に注目した結果、①「これまで他人に話したことがなかった」ことがらが口をついて出る。②語り手自らが戦前・戦中に自明としてきたことを意識化し、メタレベルの語りを行う。③語り手世代に共有された「規範」への従順さ、「規範」が崩れた時の「思考停止」の実態が現れる——など、証言者の無意識に食い込むことができた（拙著「70年の視差—伊勢原市・戦争体験者インタビューとワークショップ—」『東海大学紀要文学部第107輯』2017）
- 3 デジタルアーカイブ学会 SIG「戦争関連資料に関する研究会」のページは、残念ながら2021年4月末を持って更新が止まっている。<https://digitalarchivejapan.org/bukai/sig/warmaterials/>その後、第7回大会（2022年11月25日）のチュートリアルで、その後の研究のとりまとめを「戦争関連資料情報の連携のためのデータフォーマットについて ver1.1」として発表した（本稿末に【付録】として掲載）。
- 4 コロナ禍以前の「ヒロシマの旅」経験者に筆者はインタビュー等を行っている（『戦争をいかに語り継ぐか』p.228-234 参照）。この中の一名（「O君」）はその後東海大学に入学し、2023年の展示資料作成に協力してくれた。
- 5 筆者は、2022年6月18日岡山空襲展示室にて講演を行い、論考を図録に掲載している（「空襲経験を継承する取り組みの節目を迎えて～『戦争の意味論』を共有するための手がかり～」『第45回岡山戦災の記録と写真展（図録）』2022、岡山市）。
- 6 このデジタルアーカイブのシステム設計は、デジタルアーカイブ学会「戦争関連資料に関する研究会」の成果として開発した、展示や図録などとアーカイブをつなぐ方法論に基づくものである。現在、戦争関連資料だけでなく、草の根の地域アーカイブや資料館の一次資料のデジタル化にどのように活用できるかを検討している。（椋本輔、上松大輝「戦争関連資料をつなぐメタデータ共有システムの構想」（水島久光責任編集『LRG』第36号「特集：戦争の記憶と記録」（アカデミック・リソース・ガイド（株）、2021）参照）
- 7 ここでアーカイブ概念に関する重要な示唆をミシェル・フーコーが与えてくれていることを思い出したい（『知の考古学』『言葉と物』など）。

文中・脚注記載以外の参考文献

藤井忠俊『在郷軍人会——良兵良民から赤紙・玉砕へ』岩波書店、2009

——『国防婦人会——日の丸とカッポウ着』岩波新書、1985

田中利幸『空の戦争史』講談社現代新書、2008

平塚市博物館『平塚空襲、その時、それまで、それから』2021（図録）

ほか